

高等学校家庭科教科書から受け取るジェンダー情報

—— 高校生を対象とした調査から ——

What Kind of Information Concerning Gender Role Did Senior High School Students Receive from the Home Economics Textbooks?

— By the Research Intended for the Senior High School Students —

青木幸子（東京家政大学教職教養科） 小清水貴子（長崎大学） 大竹美登利（東京学芸大学）

石川尚子（元東京都立短期大学） 佐藤麻子（東京学芸大学付属小金井中学校）

Sachiko AOKI (Tokyo Kasei University) Takako KOSHIMIZU (Nagasaki University)

Midori OTAKE (Tokyo Gakugei University) Naoko ISHIKAWA (Former Tokyo Metropolitan Junior College)

Asako SATO (Koganei Junior High School attached to Tokyo Gakugei University)

要 旨

生徒は、学習活動の媒介をなす教科書からさまざまな情報を受け取っている。教科書に潜むポリティクスが「ヒドウン・カリキュラム」として広く認識されるようになり、同時に教師の教育活動へもその対象が広がりつつある。そこで、生徒が、家庭科教科書からどのようなジェンダー情報を受け取るかを分析することにより、生徒のジェンダー観の形成に資する教科書と教師の指導への示唆を得ることをねらいとした。

その結果、次のような特徴が明らかになった。

1. ジェンダーの授業を受けた生徒と受けない生徒では、前者の方がジェンダー・メッセージを受け取るアンテナが高い。
2. 男女で比較すると、女子の方がジェンダーに敏感であり、男女平等への志向が強い。特に、男子校では伝統的な性別役割分担が支持され、女子校では否定される傾向が強い。
3. 教科書の内容により生徒が受け取るジェンダー情報に違いがみられる。男性の育児参加の写真を載せている頁の方が、男女生徒とも平等志向の情報を強く受け取っている。

The synopsis

Students receive a variety of information from textbooks as a mediation of learning activities. The politics connoted in textbooks has come to be widely recognized as “hidden curriculum” and at the same time its subjects have been reaching to the educational activities of teachers. The object of this investigation is to obtain the hint of textbooks and teachers' leadership to contribute to the formation of students' view of Gender Role.

In consequence the following distinctive features are brought to light.

1. The students who take the gender lessons are more sensitive to the gender message than those who don't.
2. Female students are more sensitive to the Gender Role than male, and more deeply concerned with the equality of the sexes. In particular, the traditional view of the distinction of gender role tends to be supported in male schools, and to be negative in female schools.
3. The differences in gender message which students receive depend on the contents of the texts. Both male and female students are more sensitive to the message intended for the equality of sex in the page of the text which shows the male participation in the baby-rearing.

キーワード：性別役割分業、家庭科、教科書、高校生、ジェンダー観

Key words : distinction of gender role, home economics education, textbooks of home economics, senior high school students, view of gender role

1. 緒言

「女子差別撤廃条約」の批准から20余年が経過した。我が国では男女共同参画社会の構築に向けて積極的な取り組みが行われ、一定の成果を挙げつつある。なかでも学校教育の果たす役割は極めて重く、大きな期待が寄せられる所以でもある。

昭和30年代の高度経済成長期以降、家庭科はジェンダー・サブジェクトとしての使命を果たすことを期待され、男女生徒に伝統的な性別役割分業意識を醸成する役割を担ってきた。その教科が、今日、男女共同参画社会の推進に向け、伝統的な役割分業意識を払拭するための積極的な役割を付与され、ジェンダーに敏感な男女生徒の意識啓発に資する教育を期待されている。時代が変わっても、家庭科はジェンダー観の形成

に最も密接に関わる教科であることは明白である。

学校教育に寄せられる期待の大きさを勘案するとき、その教育活動の媒介をなす教科書の果たす役割もまた大きい。教科書はそこにどのようなポリティクスが潜んでいようと、社会における「正統知」として暗黙裡に了解されている。しかし、教科書の記述内容の中には、人種、性、障害、社会階級などさまざまなポリティクスが隠されていることが明らかになり、「ヒドウン・カリキュラム」として広く認識されてきている。アップルらは指摘している。「教科書は、意味を構造的に固定されたものとして暗黙のうちに提示する。そして、教科書の各頁の文章、絵、表、グラフなどは、この固定されている姿を除去するようなことは決してない。」また、「カリキュラムは、一定の観念や知識の領域を覆い隠したり、ふるいにかけたりする。

学生は、観念や情報に対して、選択的にアクセスせざるをえない。このために、学生たちはある一定の思考や行動しかとれず、他の可能性を考えたり、疑問を持ったり、他の行動をとることができなくなっている」¹と。

教科書がこのような性格を持ち、我が国における教科書の位置を考慮するとき、教科書の内容や教育活動の実際についてより踏み込んだ検討が必要である。²とりわけ、ジェンダー・サブジェクトである家庭科教科書の内容は、生徒のジェンダー観の形成に大きく影響すると考えられる。すでに、小学校・中学校の教科書を分析し、男女差別の様相を描き出した先行研究³（伊東他、1992）は、家庭科のみならず国語、社会、道徳における「ヒドゥン・カリキュラム」の実態を明らかにした。

そこで、筆者らは、高等学校の家庭科教科書8冊の内容の中からジェンダー・バイアスとジェンダー・フリー⁴の表現を拾い上げ、本文記述、挿絵・写真、図表の3つの視点から教科書内容の実態を明らかにした。⁵（石川1999、遠田2001、飯塚2001、中山2001、増田2001）。その結果、分析時点での家庭科の教科書における本文記述は、おおむねジェンダーについては配慮されていたが、ジェンダー・バイアスの表現は、伝統的・固定的な性別役割分業の存在を確認するための前提描写として記述されているものが多かった。また、挿絵や写真においてはジェンダー・バイアスの表現が散見された。

しかし、こうした教科書の記述分析は研究者視点からの見方であり、生徒が教科書からどのようなメッセージを受け取っているのかは明らかではない。教科書の描写が生徒にどのようなメッセージを送っているのか一伝統的・固定的な性別役割観を助長するのか、あるいは生徒に性別役割の存在を気づかせ、それにとらわれない意識を育成するのかがどうかは、男女共同参画社会の構築をめざす教育にとって重要な鍵になると考えられる。

そこで、教科書の記述内容から生徒はどのような情報を受け取っているのかを明らかにすることを目的に調査・分析を行った。

2. 研究方法

(1) 調査対象および調査方法

調査対象は、家庭科教員を通じて調査を依頼し、調査協力が得られた関東地区の7つの高等学校である。7校は、公立校と私立校、男女共学校と男子校、女子校といった学校形態別、およびジェンダーの授業を実施しているか否かを考慮して選択した。（表1）

表1 学校形態別、学年別、ジェンダーの授業の有無別
調査対象校と対象者数

(人)

対象校	学年	ジェンダーの授業の有無	性別			
			男	女	N.A.	総計
公立共学校	A 1	いいえ	43	63		106
	B 1	はい	47	65		112
	C	はい	16	46	2	64
		はい	42	62	2	106
私立共学校	D 1	はい	102	61	2	165
私立女子校	E 2	いいえ		69		69
私立男子校	F 1	いいえ	136			136
	G 1	いいえ	94			94
総 計			480	366	6	852

ジェンダーに関する学習を家庭科で取り入れていたのは、公立共学B校、公立共学C校、私立共学D校の3校である。

公立共学B校では、1年次に「家事労働」の中で家事分担の男女差の実態を確認した後、男が家庭内の仕事、女が外の仕事をする部族を紹介し、日本での性別役割が必ずしも固定的なものでないことを確認するなどの授業が行われていた。また「青年期の愛と性」で、男女の性や妊娠・出産を通して互いの性を思いやる学習を取り入れていた。

公立共学C校では、1年次の1学期に家族・保育領域で、男女の役割分担や「らしさ」に規定される行動をテーマとした授業が行われた。また夏休みの課題として、1学期の学習を踏まえたテーマを設定し、男女共同参画に関する新聞記事を5枚集めさせた。2学期には、これらの記事をもとにグループによる新聞づくりの授業が2時間行われた。また2年生も、1年次には同様の授業が実施されたが、夏休みの課題は出されていない。その後、特にジェンダー視点を取り入れた授業は実施されていないが、2年次ではジェンダーに関心の深い男性非常勤講師が授業を担当している。

私立共学D校では、公立共学C校と同様に、家族・保育領域で性別役割分担や「らしさ」に規定される実態に言及した授業が行われ、夏休みにテーマをもとに新聞記事を集めさせ、2学期に新聞作りの授業が行われていた。

調査時期は2000年6月～12月である。調査依頼は家庭科教員を通じてなされ、調査時期は授業に支障のない時期に設定された。調査表は家庭科の授業中に生徒に配布され、同時間内に回収された。回収率は100%である。

(2) 調査内容

筆者らの先行研究⁵の結果によれば、家事・育児への参画のし方がもっともジェンダー観と深い関わりが

みられた。特に、保育領域では子どもに対する関わり方に、それぞれの母親役割観、父親役割観があり、それが性別役割観と複雑に絡んでいた。

そこで、高等学校家庭科の教科書の中から保育のページを選び、そのページから受け取る情報を自由に記述してもらうこととした。一つは「子どもの生活と自立」、他の一つは「これからの保育」の各1ページである。双方とも本文記述においては、性別役割に関する固定的な表現はなく、保育に対して両性の平等な関わりが必要であることを主張している。

「子どもの生活と自立」のなかで「乳幼児の基本的欲求」として、生理的欲求5つ（食べる、飲む、休息、睡眠、排泄）を男の子と思われる挿絵4つ、女の子と思われる挿絵1つで表現し、社会的欲求5つ（愛情、帰属、成就、独立、承認）を大人の女性と男の子と思われる挿絵2つ、男の子と思われる挿絵2つ、男女二人の子の挿絵1つで表現している。また、「これからの保育」のなかで「男女共同の保育」として、「子どもと父親」と題して、父親が女の子の口に食べものを運んでいる写真と、父親と男の子が相撲らしき遊びをしている写真を掲載している。以下にその内容ページを示す。前者を「子どもと女性」、後者を「父親と子ども」と表記する

このような記述内容のページを提示しながら、以下の設問を設定した。①設問1：『『乳幼児の基本的欲求』と題する子どもと女性が描かれている挿絵があります。これについてどのように思われますか。』②設問2：『『子どもと父親』と題する写真があります。これについてどう思われますか。』③設問3では設問1・2について他の自由な意見を求め、④設問4：「ジェンダーという言葉を知っていますか。」と尋ねた。

3. 分析方法

分析にあたっては、ジェンダー・バイアスな表現を受動的に受け入れているか、バイアスの存在に気づいているか、バイアスの存在を指摘し、打開策を提示しているかなど、分類基準を設け、生徒の記述内容に沿ってできるだけ生徒の受け止めた情報を詳細にグループ化するように努めた。分類に際しては、共同研究者の合議の下に行い、分類基準の厳正化・公平化を図った。その結果、設問1の「子どもの生活と自立」の挿絵に対する自由記述は表2のようにグループ化できた。

比較的多かったのは「特になし」「何も」「良いと思う」「自然」など短い言葉で表現しているもので、これらをAグループとした。そのうち「特になし」「何も」

3 子どもの生活と自立

1 自立への歩み

●国や文化、時代により異なる。一般に文明が高度化するほど自立するまでの期間は長くなるといわれる。

1 人としての自立

自立とは、身体的、精神的、生活的に他を頼らずに自力で生きていけるようになることをさし、人間の場合、出生後およそ20年近くの長い期間を要する。自立への歩みは出生とともに始まり、年齢や発達によって徐々に進む。それを援助するのが大人の役割である。ここでは、子どもの発達を自立の観点から見た場合のいくつかのポイントを考えてみよう。

2 欲求の充足と信頼関係

人間はすべて生理的および社会的な欲求をもっている。乳幼児の場合、その欲求が適切に満たされると安定した精神状態となるが、うまく充足されないことが重なり不安定になり、不適応を起こす。これがしばしば発達にゆがみをもたらし、自立を遅らせることすらある。

例えば、乳児が泣くことによって空腹を訴えたとき、すぐに適切に応じてもらえると保育者に対して基本的な信頼感をもつことができる。また、乳児は自分が愛されていると感じたときに、愛してくれる人への信頼感をもつ。この信頼感は、自分はいつでも受け入れてもらえるという自信につながる。

22 乳幼児の基本的欲求



5 これからの保育

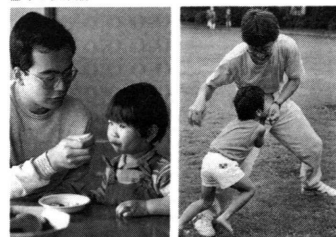
1 男女共同の保育

近代社会では、保育にあたるのは母性機能を備えている母親であるという考え方が主流をなし、これが性別役割分担の大きな根拠ともなってきた。

男女の平等性や男性と女性の役割に対する考え方、態度、行動様式は、その社会の文化の規定によるところが大きい。子どもはまず家庭生活のなかで、最も身近な父親と母親のあり方をモデルとして、自分の人間観を培っていく。労働や保育への男女のかかわり方はもとより、父親の母親に対する何げない言動や態度、親の男児と女児に対する接し方の違いなどが大きな影響を与えていく。もちろん、社会全体のあり方の影響も大きい。わたしたちの人間観もそのようにして育てられてきたはずである。

わたしたちは、従来の考え方にとらわれることなく、両性の質の平等という立場に立って、新しい男女の関係を築いていかなければならない。そして、男女が共同で保育に参加し、職業生活も充実させるなかで、新しい父親像、母親像を創造していくことが、これからの保育の課題である。

23 子どもと父親



自分たちは、男女によって違う育てられ方をしてきたかどうか、それぞれの経験を出し合ってみよう。また、それについてどう考えるかも話し合ってみよう。

などをA1、「良いと思う」「自然」などをA2に区分した。すなわち、A2は挿絵に記述された欲求受容相手としての女性を追認していると解釈し、A1は追認してはいないが消極的に評価していると解釈した。

次に、ある種の性別役割観にもとづく記述をしていると思われる表現のうち、性別役割に疑問を呈している場合をB、そうでない場合をCに分類した。性別役割を肯定したCグループのうち、「がんばっていると思った」など負担感から母親の働きを評価している記述をC1、「子どもを育てるのは女の仕事だと思った」など女性の役割を評価している記述をC2、「あらゆるところで母親が必要」のように母親の役割を積極的に評価している記述をC3に区分した。

その他、性別役割に関わらない内容の記述をDとした。そのうち「とても幸せそうに見えました」など親子のつながりを表現したものをD1、わかりやすい、わかりにくいなど記述方法に関する意見を述べたものをD2に区分した。また、質問内容と直接関わりのない記述をEとした。

設問2の「これからの保育」の写真に対する自由記述も、同様に分類基準を作成し、合議の下で分類した結果、表3のようにグループ化できた。

表2と同様に、「特になし」「何も」「良いと思う」「自然」など短い言葉で表現しているもので、これらをAグループとし、そのうち「特になし」「何も」などをA1、「良いと思う」「自然」などをA2に区分した。A1はこの写真を消極的に評価し、A2は育児に父親が関わることを追認している記述と解釈した。

次に性別役割に関する記述をしているグループのう

ち、父親の育児参加を評価している場合をB、違和感を記している場合をCに分類した。Bグループは、育児参加の評価の観点により4つに区分した。すなわち、母親だけが育児参加することに疑問を呈し、男女の平等な参画に言及しているものをB1、父親の育児参加を積極的に評価しているものをB2、母親主体の育児を前提としつつも父親の育児参加を評価している記述をB3、男性の特性に基づく育児参加を評価している記述をB4とした。

その他、性別役割に関わらない内容の記述をDとした。そのうち「子どもと女性」と同様、「ほほえましい光景だと思った」など親子のつながりに関する記述をD1、わかりやすい、わかりにくいなど記述方法に関する意見を述べたものをD2に区分した。また、質問内容と直接関わりのない記述をEとした。

なお、「何も」「別に」など同じ表現でも、「子どもの生活と自立—子どもと女性」の挿絵の場合は性別役割を肯定している意見とし、「これからの保育—父親と子ども」の場合は性別役割に否定的な意見としたのは、教科書の表現が前者は女性が育児に関わるという伝統的な性別役割の場面を、後者は父親が育児に関わるという性別役割を否定する場面を描いており、それを受容している意見であるので、両者の評価を逆のものと判断した。

4. 結果と考察

(1) ジェンダーという言葉についての認識

「ジェンダーという言葉を知っていますか」という設問4に対する回答を表4に示した。ジェンダーに関

表2 「子どもの生活と自立—子どもと女性」の挿絵に対する自由記述のグループ化

グループの特徴			記述例	記号
短い表現	消極的評価		特になし。何も。思わない。別に。	A1
	受容相手として追認		良いと思う。自然。普通。違和感ない。	A2
性別役割に関する記述	性別役割への疑問		やはり子育ては女性？ 女性だけを挿絵にするのではなく、男性も子育てするので、女性と男性をうまく取り入れた方がよい。育児は女性だけの仕事でないのかおかしかった。	B
	性別役割を肯定	負担感から評価	がんばっていると思った。がんばってくださいと感じた。お母さんはたいへんそうだな～と思いました。お母さんはストレスがたまる。	C1
		女性役割を評価	女性はほとんど家にいることが多いので、子どもを最後までみれる。信頼は女性にあっていと思います。子どもを育てるのは女の仕事だと思った。	C2
		母親役割を評価	子どもの欲求に対して母親がちゃんとしてあげなければ、子どもも大人になったときに、その子にもできなくなって良くない子になってしまう。母親すごい。母性を感じる。あらゆるところで母親が必要。	C3
その他の記述	親子・人間関係		暖かさが伝わってくる。とても幸せそうに見えました。うらやましい。	D1
	記述方法に関する意見		とてもわかりやすく書いてあると思います。難しくてよくわかんない。	D2
	無関係な意見		写真でやった方がよいじゃん。安っぽい。	E

表3 「これからの保育―父親と子ども」の写真に対する自由記述のグループ化

グループの特徴			記述例	記号
短い表現	消極的評価		特になし。何も。思わない。別に。	A1
	父親の育児参加を迫認		良いと思う。自然。普通。違和感ない。	A2
性別役割に関する記述	父親の育児参加を評価	男女の平等な参画を支持	家事・育児は母親だけの仕事じゃないんだよ。子育ては母親と父親2人の仕事だと思う。男女平等とかそういう言葉について考えれば、男性が子供を保育することもあるから、今は少し「あれ？」と思うかもしれないけど、これからはその「あれ？」が「別に普通じゃん」という時が来ると思うから、そういう事を知っておくためにもこの写真はとても分かりやすい。	B1
		父親の育児参加の評価	自分の子どもだから父親がやっても良いと思う。今の時代を考えれば当然のこと。なんかイイ感	B2
		性別役割を前提とした育児参加を評価	父親は普段仕事であり家にいないけど、子どもの時間は大切。父だからといって子育てを母に任せきりにせず、協力してやっている。父も仕事ばかりしていないで、子どもと多く接する機会を持った方がよい。休みの日のパパさんと子どもって感じ。	B3
		特性に基づく育児参加を評価	体を動かすことは父がまさっている。父親は男に厳しいが女には甘い。遊んであげるのは父でも、ごはんを食べさせてあげるのは母親が妥当と思っている。	B4
	父親の育児参加に違和感		何か変、誘拐されたみたいない怖い感じ。お母さんが離婚したか死んでしまったのかなと思った。あまり見ない光景なので少し違和感を感じる。	C
その他の記述	親子・人間関係		仲良くて良いと思った。ほほえましい光景だと思った。	D1
	記述方法に関する意見		わかんない。文の内容が簡単に分かりそうな写真だと思う。	D2
	無関係な意見		写真なので白黒で見づらい。やはり文字は大きくした方がよい。	E

する学習をしている場合、「知っている」と回答したのは44.5%、「聞いたことはある」が30.0%で、両方あわせると約7割強の生徒がジェンダーという言葉認識している。また、ジェンダーに関する学習をしていない場合、「知っている」と回答したのは7.2%、「聞いたことはある」が6.9%で、ジェンダーという言葉認識している生徒は1割強にすぎない。このことは、生徒がジェンダーという言葉が授業以外で耳にする機会が少ないことを示唆していると考えられる。

学校形態別では、ジェンダーの授業を行っている学校のうち、私立共学校の方が公立共学校より「知っている」生徒が多く、授業での扱い方の差や生徒の授業への取り組みの違いなどが、これらの差となって表れたものと考えられる。ジェンダーの授業を行っていない学校では、公立共学校、私立男子校、私立女子校ともに、「知らない」生徒が80～90%を占め、学校形態別による大きな相違はみられなかった。

(2) 「子どもの生活と自立―子どもと女性」の挿絵に対する自由記述

「子どもの生活と自立―子どもと女性」の挿絵が含まれたページに対する自由記述回答のグループ別割合を表5に示した。

総計から全体の傾向をみると、「A 短い表現」が24.6%、「BC 性別役割に関する記述」が38.7%、「DE

その他の記述」が28.5%で、性別役割に関する記述が最も多かった。「BC 性別役割に関する記述」の中では、「B 性別役割への疑問」が12.0%であるのに対し、「C 性別役割を肯定」している生徒が26.8%と、性別役割を肯定する割合が高い。「A 短い表現」の24.6%も消極的ながら性別役割を肯定していると考え、CとAの合計は51.4%となり、半数以上の生徒が性別役割を肯定する記述をしており、教科書のこのページから、5割強の生徒が、性別役割分業を肯定的に受け止めていることが示唆される。

ジェンダーの授業を行っているか否か別では「BC 性別役割に関する記述」に相違がみられた。ジェンダーの授業を行っている学校の生徒は「B 性別役割への疑問」が13.4%であり、行っていない学校の生徒の10.4%より多かった。逆に「C2 女性役割を評価」「C3 母親役割を評価」している生徒が、ジェンダーの授業を行っている学校ではそれぞれ7.4%、10.1%であるのに対して、行っていない学校では13.1%、11.6%と、行っていない学校の生徒の方が、女性や母親の役割を肯定しているものが多い。

公立・私立校別では、対象校が共学校、男子校、女子校と相違し、直接には比較できないが、私立男子校では「B 性別役割への疑問」を表明した生徒は少なく、逆に「C3 母親役割を評価」する生徒が多かったことに特徴がみられる。

男女別では、「B 性別役割への疑問」を述べる生徒

表4 ジェンダーの授業の有無別「ジェンダー」という言葉を知っている生徒の割合

ジェンダーの授業の有無	学校形態別	総 計		「ジェンダー」を知っているか (%)			
		人	%	知っている	聞いたことはある	知らない	N.A.
はい	公立共学校	282	100	23.4	38.3	36.2	2.1
	私立共学校	165	100	80.6	15.8	0.6	3.0
	計	447	100	44.5	30.0	23.0	2.5
いいえ	公立共学校	106	100	1.9	1.9	94.3	1.9
	私立男子校	230	100	11.3	8.7	77.4	2.6
	私立女子校	69	100	1.4	8.7	88.4	1.4
	計	405	100	7.2	6.9	83.7	2.2
総計		852	100	26.8	19.0	51.9	2.3

表5 ジェンダーの授業の有無、学校形態別、「子どもと女性」の挿絵に対する自由記述回答のグループ別割合

ジェンダーの授業	学校形態別	性別	総計		A 短い表現			BC 性別役割に関する記述						DE その他の記述				N.A. (%)
			人	%	A 小計 (%)	A1 消極的 評価	A2 受容相手として追認	BC 小計 (%)	B 性別役割への疑問	C 性別役割を肯定			DE 小計 (%)	D1 親子・人間関係	D2 記述方法に関する意見	E 無関係な意見		
										C 小計	C1 負担感から評価	C2 女性役割を評価					C3 母親役割を評価	
行っている	公立共学校	男	105	100	39.0	24.8	14.3	23.8	7.6	16.2	5.7	5.7	4.8	33.3	1.9	20.0	11.4	3.8
		女	173	100	24.9	13.3	11.6	33.5	9.2	24.3	5.8	6.4	12.1	28.9	3.5	17.9	7.5	12.7
		NA	4	100	0.0	0.0	0.0	50.0	25.0	25.0	0.0	0.0	25.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0
		計	282	100	29.8	17.4	12.4	30.1	8.9	21.3	5.7	6.0	9.6	30.9	2.8	19.1	8.9	9.2
	私立共学校	男	102	100	18.6	10.8	7.8	38.2	15.7	22.5	6.9	6.9	8.8	32.4	3.9	8.8	19.6	10.8
		女	61	100	9.8	1.6	8.2	67.2	29.5	37.7	9.8	13.1	14.8	23.0	6.6	9.8	6.6	0.0
		NA	2	100	0.0	0.0	0.0	100.0	50.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		計	165	100	15.2	7.3	7.9	49.7	21.2	28.5	7.9	9.7	10.9	28.5	4.8	9.1	14.5	6.7
	計	447	100	24.4	13.6	10.7	37.4	13.4	23.9	6.5	7.4	10.1	30.0	3.6	15.4	11.0	8.3	
行っていない	公立共学校	男	43	100	41.9	16.3	25.6	34.9	4.7	30.2	4.7	16.3	9.3	16.3	7.0	7.0	2.3	7.0
		女	63	100	27.0	4.8	22.2	44.4	15.9	28.6	3.2	17.5	7.9	23.8	1.6	15.9	6.3	4.8
		計	106	100	33.0	9.4	23.6	40.6	11.3	29.2	3.8	17.0	8.5	20.8	3.8	12.3	4.7	5.7
	私立男子校	男	230	100	21.3	19.6	1.7	40.4	8.3	32.2	5.7	11.3	15.2	29.6	5.2	13.9	10.4	8.7
	私立女子校	女	69	100	24.6	13.0	11.6	39.1	15.9	23.2	5.8	13.0	4.3	27.5	0.0	8.7	18.8	8.7
	計	405	100	24.9	15.8	9.1	40.2	10.4	29.9	5.2	13.1	11.6	26.9	4.0	12.6	10.4	7.9	
総計	852	100	24.6	14.7	10.0	38.7	12.0	26.8	5.9	10.1	10.8	28.5	3.8	14.1	10.7	8.1		

の割合において相違があり、ジェンダーの授業を行っている公立共学校では男子7.6%、女子9.2%、私立共学校では男子15.7%、女子29.5%である。ジェンダーの授業を行っていない公立共学校で、男子4.7%、女子15.9%、私立男子校で8.3%、私立女子校で15.9%と、いずれも女子の方が性別役割に疑問を表明した生徒が多いことが特徴である。

(3) 「これからの保育—父親と子ども」の写真に対する自由記述

次に、「これからの保育—父親と子ども」の写真が

含まれたページに対する自由記述回答のグループ別割合を表6に示した。

総計から全体の傾向をみると、「A 短い表現」が16.3%、「BC 性別役割に関する記述」が52.0%、「DE その他の記述」が23.9%で、性別役割に関する記述をしている生徒が最も多かった。「BC 性別役割に関する記述」では、「C 父親の育児参加に違和感」を持つ生徒の12.2%に対して、「B 父親の育児参加を評価」の生徒は39.8%と、父親の育児参加を評価する生徒の割合が高い。「B 父親の育児参加を評価」の「B1～

表6 ジェンダー授業の有無、学校形態別、「これからの保育―父親と子ども」の写真に対する自由記述回答のグループ別割合

ジェンダーの授業	学校形態別	性別	総計		A 小計 (%)	A 短い表現		BC 小計 (%)	BC 性別役割に関する記述							DE 小計 (%)	DE その他の記述				N.A. (%)
			人	%		A1 消極 的評 価	A2 父親 の育 児参 加を 追認		B 小計	B 父親の育児参加を評価				C 父親 の育 児参 加に 違和 感	D1 親子・ 人間 関係		D2 記述 方法に 関する 意見	E 無関 係な 意見			
										B1 男女 の平 等な 参画 を支 持	B2 父親 の育 児参 加を 評価	B3 性別 役割 を前 提と した 育児 参加 を評 価	B4 特性 に基 づく 育児 参加 を評 価								
行っている	公立 共学校	男	105	100	33.3	21.0	12.4	38.1	31.4	7.6	5.7	9.5	8.6	6.7	25.7	13.3	3.8	8.6	2.9		
		女	173	100	14.5	8.7	5.8	49.7	44.5	19.1	7.5	14.5	3.5	5.2	27.2	19.1	1.7	6.4	8.7		
		NA	4	100	0.0	0.0	0.0	75.0	75.0	25.0	50.0	0.0	0.0	0.0	25.0	25.0	0.0	0.0	0.0		
		計	282	100	21.3	13.1	8.2	45.7	40.1	14.9	7.4	12.4	5.3	5.7	26.6	17.0	2.5	7.1	6.4		
	私立 共学校	男	102	100	11.8	8.8	2.9	54.9	51.0	20.6	9.8	11.8	8.8	3.9	27.5	14.7	0.0	12.7	5.9		
		女	61	100	8.2	0.0	8.2	78.7	72.1	21.3	9.8	23.0	18.0	6.6	8.2	3.3	1.6	3.3	4.9		
		NA	2	100	0.0	0.0	0.0	100.0	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		
		計	165	100	10.3	5.5	4.8	64.2	58.8	20.6	9.7	16.4	12.1	5.5	20.0	10.3	0.6	9.1	5.5		
	計	447	100	17.2	10.3	6.9	52.6	47.0	17.0	8.3	13.9	7.8	5.6	24.2	14.5	1.8	7.8	6.0			
行っていない	公立 共学校	男	43	100	18.6	9.3	9.3	48.8	27.9	4.7	11.6	9.3	2.3	20.9	23.3	18.6	0.0	4.7	9.3		
		女	63	100	11.1	0.0	11.1	69.8	61.9	11.1	14.3	27.0	9.5	7.9	14.3	9.5	1.6	3.2	4.8		
		計	106	100	14.2	3.8	10.4	61.3	48.1	8.5	13.2	19.8	6.6	13.2	17.9	13.2	0.9	3.8	6.6		
	私立 男子 校	男	230	100	15.7	12.2	3.5	44.3	34.3	7.0	6.1	6.5	14.8	10.0	27.8	15.2	0.9	11.7	12.2		
		私立 女子 校	女	69	100	15.9	7.2	8.7	59.4	50.7	36.2	10.1	0.0	4.3	8.7	18.8	11.6	2.9	4.3	5.8	
	計	405	100	15.3	9.1	6.2	51.4	41.0	12.3	8.6	9.1	10.9	10.4	23.7	14.1	1.2	8.4	9.6			
総計			852	100	16.3	9.7	6.6	52.0	39.8	14.8	8.5	7.3	9.3	12.2	23.9	14.3	1.5	8.1	7.7		

B4」区分のなかでは、「B1 男女の平等な参画を支持」する生徒が 14.8%と最も多く、「B3 性別役割を前提とした育児参加を評価」は 7.3%と最も少なく、父親の育児参加を男女平等の視点から積極的に支持する生徒が多かった。

「子どもと女性」の挿絵に対する自由記述では、性別役割分業を支持する回答が 51.4%を占めていたことと比較すると、「父親と子ども」の写真に対する自由記述では、逆に父親の育児参加を評価する生徒が多く、教科書の記述によって生徒の性別役割に対する評価が大きく異なっていた。このことは、教科書の記述によって、生徒が受け取るジェンダー情報が大きく異なり、男女の性別役割に対する生徒の評価に大きな影響を与えることが推察される。

ジェンダーの授業を行っているか否か別では「BC 性別役割に関する記述」に相違がみられた。ジェンダーの授業を行っている学校では、「B 父親の育児参加を評価」が 47.0%、行っていない学校では 41.0%と、

ジェンダーに関する授業を行っている学校の生徒の方が父親の育児参加を評価する割合が若干高かった。逆に「C 父親の育児参加に違和感」を感じている生徒は、ジェンダーの授業を行っている学校の生徒が 5.6%であるのに対し、行っていない学校の生徒は 10.4%と、約 2 倍になっている。「B 父親の育児参加を評価」をさらに細かくみると、「B1 男女の平等な参画を支持」の生徒は、ジェンダーの授業を行っている学校では 17.0%、行っていない学校では 12.3%と後者が低く、逆に「B4 特性に基づく育児参加を評価」する生徒は、ジェンダーの授業を行っている学校で 7.8%、行っていない学校で 10.9%と後者の方が高かった。すなわち、同じページでも、ジェンダーの授業を行っている学校の生徒の方が、父親の育児参加に違和感を示すものが少なく、逆に父親の育児参加を男女平等の視点から積極的に支持する生徒が多いのが特徴である。このことから、これらの学校で行われたジェンダーに関する学習が、生徒のジェンダー観をより男女平等の視点に変

化させていく効果があったことが推論できる。

ジェンダーの授業を行っている共学校で、公立・私立校を比較すると、「A 短い表現」は公立校が 21.3%、私立校が 10.3%、「D その他の記述」は前者が 26.6%、後者が 20.0%と、いずれも私立校の方が低い。しかし、「BC 性別役割に関する記述」では公立校が 45.7%、私立校が 64.2%であり、私立学校の生徒の方が性別役割に高い関心を示していた。そこで、「BC 性別役割に関する記述」をさらに細かくみると、「B1 男女の平等な参画を支持」する生徒は、公立校で 14.9%、私立校で 20.6%であるが、「B4 特性に基づく育児参加を評価」している生徒も、公立校で 5.3%、私立校で 12.1%であり、私立校の生徒の性別役割への関心は高いが、必ずしも父親の育児参加を積極的に支持しているわけでもない。

ジェンダーの授業を行っていない学校では、共学校、男子校、女子校で相違があり、直接には比較できないが、公立共学校と比較すると、私立女子校で「B1 男女の平等な参画を支持」する生徒の割合が 36.2%と非常に高く、逆に私立男子校では「B4 特性に基づく育児参加を評価」する生徒の割合が高かったことに特徴がある。これらの相違は私立か公立かという学校形態の相違より、性別分離の教育環境が影響していると推測される。

男女別では、「A 短い表現」が、ジェンダーの授業を行っている公立共学校では男子 33.3%、女子 14.5%、私立共学校では男子 11.8%、女子 8.2%、ジェンダーの授業を行っていない公立共学校で、男子 18.6%、女子 11.1%、私立男子校で 15.7%、私立女子校で 15.9%と、概して女子の割合は低く、男子の方が短い表現で済ませているものが多かった。一方、「BC 性別役割に関する記述」では、ジェンダーの授業を行っている公立共学校では男子 38.1%、女子 49.7%、私立共学校では男子 54.9%、女子 78.7%、ジェンダーの授業を行っていない公立共学校で、男子 48.8%、女子 69.8%、私立男子校で 44.3%、私立女子校で 59.4%と、いずれも女子の方が性別役割に関する記述が多く、なかでも「B1 男女の平等な参画を支持」する割合は女子の方が高く、とりわけ私立女子校では 36.2%と高水準であった。すなわち、女子の方が男子より性別役割に関心が高く、特に男女の平等な参画を支持しており、男女に大きな相違があることが明らかになった。

5. 要約

高等学校家庭科教科書から生徒が受け取るジェンダー情報について、以下のことが明らかになった。

(1) ジェンダーという言葉について、全体で約 3 割の生徒が「知っている」、約 2 割の生徒が「聞いたことはある」と答えていたが、「知らない」生徒が 5 割を超えており、ジェンダーという言葉が高校生に周知されているとは言い難い。また、ジェンダーの授業をしていない学校では、「知っている」「聞いたことはある」生徒は約 1 割半にとどまっており、ジェンダーという言葉が授業以外で耳にする機会が少ないことを示唆している。

(2) 「子どもと女性」の挿絵に対する自由記述は、「特になし」「何も」などの「A 短い表現」をしているもの、「BC 性別役割に関する記述」「D その他の記述」に大別することができた。「A 短い表現」は、さらに挿絵に示された女性の役割を「A1 消極的評価」をしているものと、女性を「A2 受容相手として追認」しているものに分けることができた。「BC 性別役割に関する記述」は「B 性別役割への疑問」を呈しているものと、「C 性別役割を肯定」しているものに分かれ、さらに性別役割を肯定しているものは「C1 負担感から評価」「C2 女性役割を評価」「C3 母親役割を評価」に分けることができた。同じ挿絵でも、情報の受け取り方は様々であることが明らかとなった。

(3) 「父親と子ども」の写真に対する自由記述には、「A 短い表現」「BC 性別役割に関する記述」「DE その他の記述」に大別することができた。「A 短い表現」は「子どもと女性」の挿絵とは相違し、提示した写真は父親の育児参加を積極的に評価したものであることから、父親の育児参加を評価していると判断した。「BC 性別役割に関する記述」には、「B 父親の育児参加を評価」しているものと「C 父親の育児参加に違和感」をもつものに分れ、「B 父親の育児参加を評価」しているものには、男女平等参画を展望した父親の育児参加を支持する「B1 男女の平等な参画を支持」「B2 父親の育児参加を評価」「B3 性別役割を前提とした育児参加を評価」「B4 特性に基づく育児参加を評価」に分けることができた。さらに、父親と男の子の相撲の写真や女の子に父親が食事をさせている写真に対して、単に父親の育児参加とみるのではなく、「体を動かすことは父がまっさっている」「父親は男に厳しいが女には甘い」など、男という特性に基づく育児参加と洞察する意見は鋭い指摘であるといえよう。

(4) 「子どもと女性」の挿絵が含まれたページに対する自由記述は「BC 性別役割に関する記述」が多くを占めていた。なかでも特に、ジェンダーの授業を行っている学校の方が、また、女子の方が「B 性別役割への疑問」を持っているものが多いことに特徴があった。つまり、ジェンダーの授業を行っている方が、また女

子の方が、男女平等指向が強いといえる。

(5)「父親と子ども」の写真が含まれたページに対する自由記述も「BC 性別役割に関する記述」が最も多かった。特に「B 父親の育児参加を評価」が4割に達し、「C 父親の育児参加に違和感」を示した生徒は1割強にとどまっている。このことは、「子どもと女性」の挿絵では性別役割分業を支持する回答が半数を占めていたこととは逆に、このページでは父親の育児参加を支持する生徒が多くなっていることを示している。すなわち、教科書の記述によって生徒が受け取るジェンダー情報が大きく異なり、男女の性別役割に対する評価に大きな影響を与えていることが明らかとなった。ジェンダーの授業を行っている学校の生徒の方が、行っていない学校の生徒より、また男子より女子の方が父親の育児参加を積極的に支持する傾向が強いことは、「子どもと女性」の挿絵に対する自由記述と同様の傾向であった。

(6) 以上のことから、本調査対象校においては、第1にジェンダー授業の有無により、第2に男女の性の相違により、第3に教科書の記述の相違により、教科書から受け取るジェンダー情報に違いがあったことが明らかとなった。

第1のジェンダー授業の有無では、ジェンダーの授業を行った学校の方が性別役割に違和感を持ち、男女平等指向が強かったことは、ジェンダーの学習を通じて、教科書の挿絵に込められたジェンダーに関するメッセージを受け取るアンテナが高くなっていることが考えられる。ジェンダーの授業内容はさまざまであり、ジェンダーの学習をすることで男女平等指向が強くなるとは必ずしもいえないであろうが、今回調査した学校での取り組みでは男女平等指向が増していることが確認された。

第2の生徒の性別による教科書から受け取るジェンダー情報は、男子より女子により敏感に受け取られていることが明らかになった。特に、女子は性別役割が固定化されることにより、職業選択の自由などに一定の制約が加えられることを敏感に感じ取り、性別役割への疑問を呈し、男女平等への指向が強くなると考えられる。なお、母親役割については私立男子校で最も評価が高く、逆に父親の育児参加については私立女子校で積極的に支持されており、男女別の教育は、男子は性別役割を支持し、女子は否定する傾向にあるという特性を一層助長していた。

とりわけ男女共学による教育利益を享受することができない男子高校生においてこのようなステレオタイプの性差意識が顕著であるとの報告⁶もあり、本調査も同様な特徴が認められた。

第3に、教科書の記述により、受け取るジェンダー情報に相違があり、伝統的な性別役割を否定する男性の育児参加の写真を載せているページの方から、生徒は男女平等指向を強く持つ傾向があることが明らかになった。

学校生活において日常的な教育実践の中枢を占める教科書の記述内容—本文、挿絵、図表、写真などから生徒が受け取るジェンダー情報の位相は複雑である。ジェンダーは社会のさまざまな領域に及び、複雑に入り組んで日常生活に浸潤しながら問題の根を張り巡らせている。家庭科はジェンダー・サブジェクトとして、その学習内容においてジェンダー・ポリティクスを開放する教科であることが求められている。

本調査は、関東地区の限られた高等学校の生徒のジェンダー情報の受け止め方の一端を明らかにした。この結果から学ぶべきことは、教科書の執筆者・編集者・教師には暗黙の了解に敏感であることが求められるということの再確認である。関係者は、文章表現や挿絵・写真・図表など顕在的カリキュラムの背景とねらい、行間を読み取る力が必要であり、この力こそ社会の広範囲にわたり複雑に入り込んでいる潜在的カリキュラムによるジェンダー・ポリティクスへの気づきを促す力となろう。生徒は、表と裏のカリキュラムを批判的に分析することを通して、男女平等・男女共同参画社会とはどういう状態の社会かを実証的に学び、確かな手応えをもってジェンダー観の形成を図っていくことができよう。⁷そのような学習活動を促進する教科書であらねばならないと考える。

謝辞

本研究は、1998年から2000年まで日本家庭科教育学会関東地区会の研究グループ「ジェンダーと家庭科教育」研究会が、「ジェンダー視点からの家庭科教育の再構築」をテーマに関東地区会からの助成を受けて行ったものである。このような研究の機会を与えてくださった日本家庭科教育学会関東地区会、および調査にご協力をいただいた教員、生徒のみなさま、そして故飯塚和子氏に感謝申し上げる。

注・引用文献

1. Michael W. Apple and Linda K. Christian-Smith eds. *The Politics of the Textbook*, London, Routledge, 1991, p.79-80
Michael W. Apple, Geoff Whitty, Akio Nagao ; *Curriculum Politics—National Curriculum and Recent Education Reform*—, Tokyo, Toshindo,

- 1994 (マイケル・W・アップル、ジェフ・ウィッティ、長尾 彰夫；カリキュラム・ポリティクス—現代の教育改革とナショナル・カリキュラム—、東信堂、1994) p.5-66 においてカリキュラム・ポリティクスを批判的に論じている。
2. 日本教育学会「ジェンダーと教育」研究委員会、報告集 ジェンダーと教育,2004,p.55～63
 3. 伊東良徳・大脇雅子・紙子達子・吉岡睦子,教科書の中の男女差別,明石書店,1992
 4. 「ジェンダー」を社会的文化的性差という意味に限定し、現在の性別役割やらしさを表現したものを「ジェンダー・バイアス」、逆に社会のジェンダー・バイアスに気づき、開放を促すような表現を「ジェンダー・フリー」の用語に類するものとして拾い出した。
 5. *石川尚子・大竹美登利・堀内かおる・由比ヨシ子,小学校家庭科教科書のジェンダー分析,日本家庭科教育学会関東地区会誌,第2号,1999, p.98-105
*飯塚和子・小谷敦子,高校生のジェンダー意識の形成と学校教育—男女共同参画社会に向けた家庭科教育—,平成11年度(財)東京女性財団助成金研究,2000
*遠田瑞穂・吉野真弓・佐藤麻子・大竹美登利,中学校「技術・家庭」教科書のジェンダーバイアスに関する分析—家庭分野について—,日本家庭科教育学会誌,44(2),2001, p.117-126
*飯塚和子・青木幸子・岡村貴子・大竹美登利,高等学校家庭科教科書のジェンダーバイアスに関する分析(第1報)—家庭経営領域について—,日本家庭科教育学会誌,44(2),2001,p.127-136
*中山節子・石川五月・飯塚和子・大竹美登利,高等学校家庭科教科書のジェンダーバイアスに関する分析(第2報)—被服,食物,住居領域について—日本家庭科教育学会誌,44(2),2001, p.137-145
*増田あけみ・斎藤美保子・杉山由美子・大竹美登利,高等学校家庭科教科書のジェンダーバイアスに関する分析(第3報)—保育領域について—,日本家庭科教育学会誌,44(3),2001, p.272-279
 6. 江原由美子,男子高校生の性差意識,藤田英典;ジェンダー問題の構造とく女性解放プロジェクト>ジェンダーと教育,世織書房,1999,p.189-218
 7. 青木幸子,家庭科の二つのポリティクス,家庭科通信,5(2),大修館,2000, p. 3-7